

宗祇の時雨（二）

土田龍太郎

この時雨の句に先立ちて宗祇のよりどころとなれる秀歌なきにあらず。新古今集に載れる

世にふるは苦しきものを真木の屋に

やすくも過ぐる初時雨かな

の一首、宗祇句の本歌たりしことつとに知られたり。作者かの源三位頼政の女にて、年長けて宜秋門院に仕へたりしかども、若きころは二條院の女房なりしかば二條院讃岐と呼びならはしたり。この讃岐、世に名を揚げし歌人にて秀歌少からず、勅撰集に入集せる歌七十首にあまれりとぞ。右に引ける一首げに拙からず、おのが世に經る苦しみを、降る初時雨のいともやすげなるにむかへて一息に詠み下せるわざ、いと巧めりと言ふをうべし。

歌人と連歌師と志すところ必ず同じとも言ひがたかるめれば、ここに讃岐の歌と宗祇の句を比べ見えずぐに優り劣りを論はむはずろに危ふかるべし。されども幽玄と餘情にとりて言はむには、宗祇の句の奥深きことたとへむにもなし、讃岐の歌のえ及ぶところにはあらず。讃岐の歌にては内と外とのけぢめきはだちて、世に經るわが身の苦しさ初時雨のやすくうち過ぐるさまを比ぶるのみにてこそやみたれ。宗祇の句にてはこれにかはりて、世にあるおのが身のつらさやがて時雨のわびしさとなり、時雨のわびしさかへりてわが心のやるかたなさにことならざれば、風景と心緒とあひかよひ、内と外とあひとほりてかたみに分ちがたし。わづか十七字の内におのづから別乾坤を建立し内外即融の境界に入りしがごとくなれば、宗祇のいさをしただならず、古今獨歩と言はむも言ひ過ぎざらましとぞおぼゆる。この句讃岐の秀歌によれるはさることなれども、藍より出でて藍より青しと言ひてはばかりなきにたり。

俳諧に耽るもの今の世に珍しからねども、昔の連歌師に習はむのともがらのまれなるはいかなるゆゑにやあらむ。一座興行までこそはかたからめ、たまさかのすさびにてもあれ、せめて發句ばかりだに作りてみばやと思はでやはあるべき。連歌の廢れゆかむもくちをしとて、おほげなくも宗祇句にまねびてわがものせし拙吟、心あらむ人の見るもはつかしけれと言はでやみなむもくやしければ、ただはしつかたにぞ記しておくなる。

いきわびてさても世にふる時雨かな

(六元)

(平成三十一年二月三日受附)